



Oxbridge 研修を経て

八木 郁哉

自分がこの研修に参加しようと思ったきっかけは、自分の夢を模索する第一歩としてである。自分の将来はこの研修に参加して、いろいろなことを学ぶにつれ、少しずつではあるが見えてきたと思う。実際には英語の能力や積極性が大きく伸びたか？と問われたら yes と頷いて答えられないだろう。だが、

成績などよりも重要な大きなものを得たと感じている。そんな格別な参加した人しか味わえないものをお伝えしていこうと思う。

まず、自分の Oxford での生活について。Oxford には多くの外国人留学生がおり、RAの3人のうち2人も留学生だった。RAの外国人3人が滞在中我々をおもてなししてくれた。もちろん、会話は英語である。RAの3人の英語は正直言って聞き取ることはできた。つたないが会話が成立する。それは、彼らがフレンドリーで優しい英語で話しかけてくれたからである。それと相手が分からないと感じると彼らは別の言い方に変えてくれたり、自分たちの返答を待ってくれた。しかし、ひとたび街に出て買い物などしようとするすると英語のスピードが格段に上がり、ボキャブラリーもある程度しかないので yeah や yes, no などの簡単な返答しかできなかった。しかも、「言わないとわからない」という文化であり黙っているとただ放置されるだけで誰も助けてくれない。日本のような「以心伝心」「思いやる」はまったくないのである。お国柄といったところだろうか。英語の難しさに直面した場面でもあったが、今までしたこともなかった外国人との会話に楽しさを見いだしたのも事実で、身振り手振りで自分の考えや意見を表現しているときはこの英語力じゃあ通用しないなと思いつつ頑張っていた。それでもなんとか会話が続けていく。自分をアピールして、相手に意見を聞き出すことは途方もないことだと改めて実感した。

Oxford での現地の日本人紅林さん・岡本さんの講義は様々な視点やアプローチに富んでおり、自分たちに大きな影響や刺激を与えてくれた。特に自分が一番印象に残っているのは紅林さんの話である。紅林さんの話を簡単にまとめるとこんな感じである。自分が変わるチャンスはいろんなところにもいくらでも転がっている。例えば、学校のなか、携帯電話を見ているとき、お店に出かけたとき、etc...,そんな身近な場所に無限の可能性が広がっていて、それを見つけ出していくのは自分の探求心・好奇心次第である。この好奇心がなくなってしまうたら、我々は成長できなくなるということと同意である。人間は好奇心旺盛であるから研究・調査し新しい発見をし続けてきた。知恵を共有し、全体的な底上げとなる。

Oxford の学生に話しかけて思ったのは圧倒的な知識量。我々の質問になんでも答えてくれる。留学生であるがなんでも把握している。きっと想像であるが、自ら興味をもって調べたのだろう。好奇心がより強い人間がより大きく成長していくのだろうと思う。また、Oxford は課外活動も積極的に取り組んでおり、前高と同じような文武両道をしていた。岡本さんの場合は父親と全く同じことを言っていた印象が強いが、話の中から今の自分に最も必要だと感じたのは「具体化」ということ。物事をどんどんと具体的に作る。そうすることで今やらなければならないことが見えてくるし、将来の生き方までつながっていくと感じた。当たり前のことに疑問を呈し、とことん挑戦していく。これが学んだ教訓である。

お二人の話を聞いていると、言葉にはしないものの二人とも影ではしっかりとひたむきな努力を重ねていて、自分の興味のあるものにのめりこんでいるようにも思えた。それに感化されてか自分も元々好きだったことを思い出して将来やりたいことが少しずつであるが見えてきている。ここで、この研修に

参加して自分の目的の1つに直面できた。外国で暮らしていたり、知識や幅広い視野を持ち、様々な経験がある人の考え方は若者に教養を与え、豊かな人間性を育む。その中に自分はいて、新しい知見を得て、成長している途中である。



イギリスの街並みは日本と大きく異なって歴史的な建造物がそこかしこに立ち並び、街の雰囲気にも物々しさを加えていた。世界的に見ても新しい風潮を街に取り入れている都市が多い中、ここでは過去の功績が保存され、現在へと受け継がれている。ロンドンをバスで観光して回った時、建物の老朽化に対する建て替え工事を見た。その様子は外壁のみを取り残し、その外壁の中に新しい建物を建設していくものであった。皆さんも知っているであろうビックベンも建設以来の約150年ぶりの大改修であった。逆にそんな瞬間を見ることが出来たのはとてもラッキーであったのかもしれない。だが、やはり見れなかったのは残念でもあった。有名なバッキンガム宮殿ではスペイン人修学旅行生に出会ったが、お国柄を前面に出して初対面だが記念写真的なものを撮ってしまった。すごく本能的に彼らは行動している気がして日本人の小心者感が浮き彫りになった。スペインの印象が大きく変わった。イギリスにいながら、,,,,

全力疾走で駆け抜けてきたこの研修は自分の人生最大の経験で不安もあれば、楽しさもあり、改めて周りの環境や日本の良さを再発見できたと思う。イギリスではイギリスの食事、生活スタイル、文化で慣れていないことばかり。すべて0から。だからか自然と日本と対比してしまう。日本基準。日本のプライド。「これは日本の方がいいな」「でも、これはイギリスの方がいいな」なんて思いながら過ごしていた。日本が良く見える。加藤先生もそう言っていたが普段の生活では身近な日本があまり見えていないのである。イギリスに行ったことが日本の良さを自分に気づかせてくれた。

また、自分の考えていた世界のスケールの小ささと「生き様研修」の本当の意味に出会った。世界の断片に触れ、自分にとっての最適解を取り入れる。反映させて、学校に還元して、みんなに伝播できる。校長先生や松井さんがおっしゃっていた前記のことを研修を受けた自分たちは行う義務がある。学校全体で共に高め合っていくのだ。

最後に、自分たちに同行していただいたISAの松井さん、加藤先生、共に経験を積んだ仲間たち、現地でお世話になったクリスやRAの3人、両親。自分たちはとても恵まれていて、感謝の気持ちをこれからの行動で示さなければいけないと思います。ありがとうございました。

